

報



會

會 岳 山 本 日

44

月 三 年 十 和 昭

登山とスキー競技

加 納 一 郎

登山仲間とスキーをやらない人は今は甚だ稀である。と同時にそれらの人達のうちで、今年二月、札幌で行はれた全日本スキー選手権大会の成績に注意を拂つた人もまた同じほどに稀であらうと私は思ふのである。といふのはいまだに冬山をやる人達が競技スキーにあまりに関心を持たなざることを指摘したいためである。冬山も競技も幼稚な時代にはそれでよかつたかも知れないが、双方ともに世界的のレヴエールにまで追いついて、登山仲間のうちにもスキー技術の本質についてあまりの自負に陥りすぎるものもあるにおいては、一言なかるべからずである。私は特にこの紙上を選んで今年の競技成果の示す一つの著しい事柄をのべて見たいと考へたのである。

登山と競技とがまるきりムードの違つたものであることは誰でも承知の問題で、同じくスキーをはきなから両者が甚だ疎遠で、感情的にも融和がとれてゐないことは、日本ばかりでない、ヨーロッパでも中欧と北欧との間に同じ状態が見られる。しかし、ヨーロッパであるからといつて日本もそれでない、やむをえないと打ちすてゝおいていゝだらうか。

山黨がツダルスキーのあの立派なシュテンボーゲンと一緒に彼の頑固

さをも共に繼承してゐるかの如く見えるのは甚だ遺憾である。私はこゝで技術上の理窟ばつたことを扱はうとは思はないが、たゞこれだけは事實間違ないと思ふ。即ちスキーの登降、平地行進の技術においては山黨は何といつても競技者には及ばないといふこと、また及ばないことをもつて決して恥とするには當らないこと。但だこの事實に目を刮き、技術本来の研鑽者たる競技者に聽従すべきところを快く聽従するの雅量が必要ではあるまいかと私はいふのである。私のみがいいのでない。これはむしろ高橋次郎君らによつていひふるされた問題なのである。

冬山の経験にとめる尊敬すべきエキスパートでもスキーと雪の全分野にわたつて必ずしも十分の認識をもつてゐるものでないことを私はしばしば見る。これを詮じつめると、登山者は多く無雪地都會の居住者であり、たとひ多大の時間を山に投没するにしても、なほ「雪の上になでかけに行くもの」であつて、つひに心身ともに「雪の上に住むもの」と合一の境地にまで達するのは至難であるといふことになるのではないか。

これに關連して我國スキー競技連年の成果を觀察すると次のやうな變化が認められる。初めは無雪地都會

の人達が一種の驚異心から多大の精力を傾倒した。そして雪國に生長した人々はある種の感情をもつてこれを見てゐた。(これは今でも数多いスキーファンといふ中間的存在として残つてゐるが) 次の時代にはやはり少年時代から雪の上にスキーをはきなした一部の人々によつて優勝圏が獨占せられた。一部の人々といふのは學生で、やがて都會地へ進學する。無雪地へ移つてもスキーのため多くの時間を當て得たからなほ首位を占めてをられたが、スキーが學生外の全般に行き亘ると無雪地居住の學生が如何に時間をさいても遂に雪國常住者には抗しえなくなつてしまつた。學生選手の没落。外國語の素養のないのがちつともハンディキヤップにはならなくなつた。これが今年の競技成果ではないか。北歐から選ばれて來たスキー家が靴屋のオツサンや油屋の主人であつたことが思ひ出されるのである。競技部内においても既にやうに雪に住むものゝ強さが明瞭テキメンにあらはれてきてゐる。冬山の立場からも、この事實によくよく注目してもらひたいと私は思ふのである。

山スキーの特殊性のみを高調してアルプス直輸入のスキーをふり廻すのは一昔前のことではなかつたらうか。中欧對北歐では言葉も不自由だし民俗も違ふ。日本はただ長いお形でノルウェーの雪からイタリーの雪までも一國に兼ね備へてゐる。往來に旅券はいらない。もとより民族的

な恩怨のあるはずはない。日本の山のスキー術は日本の基本スキー術から培はれるべきだ。といふ説には誰も異存はあるまい。たゞそれが培養基として十分であるか否かは見解の岐るところであらうが、今なほ日本の競技スキーは山黨に寄與するところ皆無のごとく思惟するものがあるればそれは甚しい認識の不足であると私はいひたい。細論をすれば際限がない。本來同好、釋然として就くべきに就くが正道ではないか。やゝもすれば双方の間に横はる如く受けとられた溝渠の埋覆作業の一日も早く竣功せんことを、私は殊更に指導者の位置の方々に衷心より切望してやまない。

(文題として「登山とスキー競技」は編輯係が勝手につけたことを筆者に御詫する)

北海道に於ける冬期登山の近況

犬飼 哲夫

北海道に於ては積雪が多く且その期間が長いからスキーが相當に普及してゐて恐らく標高千米以下の冬山のスキー登山ではこれ位盛な所はないであらう。札幌市附近でも一日行程の山に夫々異つた方向に約八個の登山小屋が設けられ何れも少くとも十五人の宿泊に適し日曜のスキーハイキングには婦人子供のスキーヤーが非常に多い。手稻山の如き標高八

百米にバラダイスヒュッテがあり毎日曜初心者を交へ二三百人の登山者があり市をなす状態である。然し斯くもスキー登山の多い割にシニタイグアイゼンを使用する登山者が少い。勿論中央山系を初めとし、若別岳、夕張岳、エゾ富士、日高山脈、斜里岳等アイゼンテクニクに相當面白い標高二千米位の山は無いでもない。

北海道に於ける大勢は自然に普通の低い山のスキーテクニクを直ちに何れの山岳にも適用し得ると信ずる者が増して来て近來はアイゼンを使用すべき登山に冒險的スキー登山を決定する者が生じて来た。

地方新聞のスポーツ欄には往々登山コース並に記録が出てゐるが從來の文獻記録を無視し、或は甚だしく非専門的のものが多く、北大に於ける登山團體等は勿論アカデミクな研究機關で素より大衆に關與すべき性質のものでないからその登山術も又機關雜誌も一般には利用されてゐない。だから北海道に於ける冬季登山の傾向は著しく幼稚なものであり換言すれば甚だしく研究心に乏しいと云ふことになる。これは主としてスキー術に於ては兎角直に甚だしい自負心を起し易いことから生じた結果でグレンデから直に山岳に導かれ然も登山術には殆ど無關心な状態である。事實一日行程の札幌附近の山でも少し強い吹雪の日には大小様々の遺難があることはやはりその結果である。

二千米に近い標高の山でも北海道

では往々にして雪質が變性して山頂迄もスキーを使用し得ることがあるが偶々これに遭遇して大様を察して新聞等に頼るので冬季登山に對する準備を疎かにする様になりその後の同一の山の登山に早くも遺難者を出す様なことを繰り返すのは特に北海道の山の如き天候の變化と共に著し

創立三十週年記念晩餐會

期日 昭和十年五月四日(土)
場所 京橋明治屋ビル六階

於中央亭

今般四月四日開催の豫定なりし有志晩餐會を延期し、創立三十週年の記念晩餐會として盛大に催す事となりました、多數會員諸氏御誘合せ御來會下さい

世話人 磯野 敏男
尾崎 計藏
喜八

山岳圖書展覽會

日本山岳會創立三十年記念として山岳圖書展覽會を東京日本橋、丸善本店階上に於て昭和十年五月三日―七日(五日迄)開催の豫定、詳細は追て發表す。

く状態を異にする所では當然なことである。先年北大の一學生が手稲山で行方不明になつた際の如きこの搜索に志願した有志が百名以上に達しその搜索者の遺難防止に苦心した如き滑稽を演じた。これもよく北海道に於ける近代スキー登山色を反映した状態である。

又大雪山の愛山溪温泉は大雪山冬季登山口として喧傳されてゐるに拘らず防寒、食糧、の普通の宿泊に關しても恐る可き幼稚なものである。

従つて北海道には何處の山に行くにも日本アルプスの様な登山案内も又冬季登山に適する人夫も一人もない。然しやがては冬の北海道の山も大分紹介されて來て本冬は十勝岳に外國人數名も見えたから冬山人夫も必要になる。三月十一日から十四日迄この意味に於て十勝岳を控へてゐる上富良野村と北海道景勝地協會が主催で十勝岳を中心に冬山案内者の理想的養成を計畫し、實地コースの指導登山術等の講習をすることになった。講師は北海道廳内の熟練したスキーヤーの外に北大山岳部長橋内吉彦氏、又應急療法講習のため北大教授柳莊一氏と日本山岳會員黒瀬太一氏、岡本三男氏と私と出演することになった。斯くして北海道の冬山の登山も漸く繩纜的ではあるが理想に近づく傾向が生じて來たことは一般大衆のために慶賀すべきことと信ずる。本格的登山の指導及講習は北大山岳部の十二月十勝岳の合宿とスキー部の三月末の愛山溪合宿等があり近來ポツ／＼各官廳會社でその有志が相寄り先輩の指導等により研究的訓練をなす様な傾向がある。

浦松佐美太郎氏よりセガチニ三部作の内ウェルデン原色版木版畫の寄贈を受け、本會は大いに感謝し早速額縁に入れ圖書室に掲げた。

鳳凰山

二月十九日より二十四日まで南アルプス前衛鳳凰三山を縦走にまいりました。私達はスキーで尾根傳ひに辻山を経て南御室へ、併し雪が深くて辻山の途中でビワークを強ひられました。辻山の降りから南御室まで所謂御室横手の密樹林の滑降は日常のいゝまだ木の香りが高い小舎へ着きました。午後になつて砂拂まで二時間のラッセル致し翌日の登行を樂に致しました。空模様は夜の中から悪化致しまして風の叫びは針葉樹を轟々と吹えて、空は陰鬱な暗黒色に塗られてゐたが七時三十分頃陽光が射し始めたので大急で輪標をはいて直進に昨日のラッセルの跡を登り、アイゼンに代へました。山頂は列風で雪煙が飛び、藥師岳から觀音岳の頂を踏んだころは猛烈な吹雪で目標が見えなくなる。此の急斜面の尾根を下つて赤ヌケ頭より地蔵岳へ正午過ぎ着きまして賽の河原を澤へ降り、澤續きに北御室へ着きましたが戸がなく小倉中雪だらけです。吹雪は暗夜になつても吹き込んで寝てゐるスリーピングバッグの上に二寸位も積りました。ドンドコ澤の下りは大密樹林で丈餘の積雪は軟かく腰、胸をも没し雪泳しながら急坂を背木の湯へ暗くなつて着きました。此の湯には冬季には誰も居りません。翌朝は鳥居峠を経て莊崎にてて歸京致しました。一〇・二・二七、早川安治

圖書基金に就てのお願い

本會の圖書基金が非常なる成績を納めましたことは本會特に圖書係の深く感謝する所であります。

右 圖書基金を以て妙からぬ和洋山岳圖書を購入し、各國山岳會誌及び本邦登山團體の會報を合本整理することが出來たのであります。

然しながら圖書室の内容を充實せしむるにはまだ、多くの費用と時間と努力とを必要とします。本會の圖書室を豊くとも本邦に於いて最も完備せる山岳圖書館たらしむるため此の上と會員諸氏の御後援をお願い致します。

從來圖書基金の御出損を願つてゐました方々へは別に書狀を差上げる事に致しますが、この會報誌上を以て尙篤志の會員諸氏に圖書基金の御援出をお願い致す次第であります。

追而御申込の形式は左の通りであります。

日本山岳會圖書基金申込書
一、昭和十年度圖書基金何口何

圓也

(但し一年額金五圓)

右申込候 貴 名

日本山岳會御中

御申込書丈けを先きに頂戴して後日御拂込下さつても結構で御座います。



會務報告

第六十五回小集會

昭和十年二月十四日於三會堂
一、ゲオルク・ジムメルの山岳觀を
中心として

會員 辻 莊一氏

松方理事の紹介で辻氏の講演に入る。内容はジムメルの「ドイツアルペン」の大意を紹介しつつ、それに對する氏の見解を約一時間半にわたつて述べられた。「貨幣の哲學」の著者としてのジムメルにも、またかゝる自然觀を特殊な山岳觀を有つてゐることから始め、要するにジムメルの論ぜるアルペンの景觀の極端は氷雪地帯にして、その美觀は、感情移入を拒否して絶對的靜、歴史のうちにありて動かざるものを象徵する所にありとせるも、講演者は文化の發達に従ひ、生の概念の擴充が行はれ、從來生を拒否せるものと考へられたものが、新らしき生觀念より見れば却つて生に充滿せるものとなることを一般藝術及自然美について例證し、將來においては氷雪地帯におい

ても十分なる生感情の移入が行はれ、特に登山行動による生行はるゝことによつて、ジムメルの考を更に發展止揚し得るものなることを示された。この講演は改めて「山岳」のために書きおろされる筈である。

講演後松方、小島兩氏の質疑應答が辻氏との間に行はれたのは今後も續けて行きたいと希つてゐる。
兎にかくかゝる問題を中心に會を開いたのは從來餘りなかつたことゝて、私達としては大いに得る所あつたことを附言して置く。當日の參會者氏名左の如し。

高頭仁兵衛 松方 三郎 酒井 忠一
石塚秀次郎 飯塚篤之助 福田嘉四郎
茨木猪之吉 黒田 孝雄 内田桂一郎
小林 丘 湯淺 巖 堀田 彌一
淺原 重繼 伊勢 環 泉 眞善
櫻井 信雄 慈留邊留ジヤン
東 良三 吉田 竹志 田中 菅雄
岡本 勝二 土屋 鎮雄 橋本晋七郎
磯貝藤太郎 小島 久太 藤島 敏男
田口 一郎 逸見 眞雄 西川 信義
中司 文夫 岩崎京二郎 飛川 維之
島田 興 廣瀬 潔 田邊 主計
木村 一男 川喜田壯太郎 田代 豊彌
外ニ會員外十二名

退會者

昭和十年二月中

(一五一) 東京市 磯山 知治
(一二三〇) 同 岡部 部
(四八) 大阪市 榎本 佳樹
(一四七四) 兵庫縣 阿部 三郎
昭和九年度收支計算報告

會費

入會金

利息

諸利

廣告料

雜收入

山岳賣却代

前年度繰越金

合計

支出

雜誌印刷費

會報費

借室料

昭和九年度收支計算報告

入會金

利息

諸利

廣告料

雜收入

山岳賣却代

合計

支出

雜誌印刷費

會報費

借室料

雜誌編輯費

研究調查費

集會及役員會費

幻燈版及室内設備

人件費

旅費

通信費

印刷物及文具用紙

電話費

臨時費

關西部諸費

雜費

合計

代表者變更

大阪府北區澤上江町四ノ三一

(五八五) 日本アルカウ會代表者

小川正十郎

東京市日本橋區本石町日本銀行内

(一三五六) 日本銀行山岳會代表者

本間 正雄

山日記編輯に際して

一九三三年度山日記の編輯に當つて、山小屋、山案内、登山團體等の調査に着手しました。

又、登山日程表の改訂にも努めて

居ります。

山日記の内容全般に至つて御氣付の點、係まで御知らせ願ひます。

新着圖書

防災科學(風災) 一、岩波書店
地學雜誌 二月號 東京地學協會
山 同 梓書房
寫眞月報 三月號 小西六本店
ケルン 同 朋文堂
山小屋 同 同
ツリースト 同 同
ジャパンツリーストビニロー
登山とスキー 同 黎明社
紫居 第三號 靜岡高校紫居會
柗火 第二號 行雲會
黒木立 三月號 關東岳愛會
山彦 同 東京山彦山岳會
ベルグ 同 岡山山岳會
山 同 横濱山岳會
旅路 同 東京アルカウ會
旅行 同 關東旅行クラブ
山旅 同 東京旅行クラブ
アルカウ趣味 同 八王子山岳會
がくれい會報 同 日本アルカウ會
關西學生聯盟時報 二月號
白樺會報 同 同
關東山岳會報 同 同
京都山岳會報 同 同
山人會月報 同 同
魚市場山岳會報 同 同
O.T.M.會報 同 同
東京登歩溪流會報 三月號
健健ワンダーフォーゲル 同 同
日本登高會報 同 同
明崇山岳會報 同 同

廣島山岳會報 同
東京市山岳部報 二、三月號
臺灣山岳會報 同
武藏山岳會報 一一三月號

The Geographical Journal Jan. 1935

1935

Appalachia Feb. 1935

Trail and Timberline Feb. 1935

The Prairie Club Bulletin Feb. 1935

1935

The Mountaineer Feb. 1935

Natural History Feb. 1935

La Montagne Jan. 1935

Planinski Vestnik Leto 1935

Stevik 1.

會員寄贈圖書

深山久彌著 わが山

春日俊吉著 日本山岳遭難史

以上 黒田孝雄氏

小杉未醒著 景勝の九州

以上 堀藤吉郎氏

圖書基金申込者氏名

東京 細川 景正氏 一口

同 田邊 主計氏 一口

京都 田中喜左衛門氏 一口

昭和十年三月二十八日印刷
昭和十年三月三十一日發行

發行所 日本山岳會

編輯者 額田 敏雄

編輯兼印刷者 逸見 眞雄

發行所 日本山岳會

廣告・手取後 進 恒 社

電・支・一六四九番

刷印所刷印木多

伊藤秀五郎著 四月十日發行

北の山

登山黎明期にあつた北海道に、幾多登高と漂泊の若き日を送つた著者の紀行、論説、隨筆を盛れるもの。北の山の豪放素朴なる原始的姿相を捉へ、それに傾倒した著者の觀察と哲學とは、稀に見る優れた山岳紀行文となり、また飽くまで高くして鋭い論説となつてゐる。蓋し遠く北千島にまでも及んでゐる遍ねき足跡と、夏冬を問はず続けられた登高の實踐とは同時にまた著者が自然科学者であり抒情詩人であることと、相俟つて、茲に独自の色彩を藏する著書となつたものであると信ずる。

坂本直行氏挿畫及び裝釘
挿畫 五度刷 三枚單色五枚
菊判二〇六頁 價二圓五十錢

松方三郎

自序 紀行

北海道の山と平原

北海道的の山と平原

雄冬山附近の山道と漁村風景

石狩岳とニベツツ山

冬山北見

狩場山

北千島の印象

感想・小論・隨筆

靜觀的とは

山岳文學論その他

山と山登りととの關係について

山の擧げりと人間化

閑窓雜記

富士の雪

不二行脚

臺灣の印象

スウイス日記

氷河と萬年

雪の山

日本アルプスウエストン著

登山と探検 岡村精一譯

臺灣の山 兒島勘次著

千島の山 長谷川浩三郎著

赤外線寫眞 (増訂版)

山村語彙

柳田國男著

正篇及後篇

送・二

錢

錢

五七七二田神話電
四四六八七東京東替振

房書梓

區田神市京東
八ノ一臺河駿